

子豚の更なる生産性向上を目指す

哺乳豚のための ミルキーウィーンフィーダー

今回は、福島県でハイコープ種豚によるウィークリー管理を実践している母豚210頭規模の一貫生産農場を取材した。2015年度から多産系母豚に移行し、産子数が増えてくる中で、哺乳豚の健康維持と育成率向上のため「ミルキーウィーンフィーダー（MWF）」の活用を始めたという。そこでこの農場におけるMWFの活用事例を紹介する。

農場データ	所在地：福島県	飼育頭数：母豚210頭
	従業員数：6名	

どの子豚をMWFで育成するか 引き抜きのポイント

MWFは、母豚に代わって哺乳豚を育てる給餌器。人工乳等の粉餌を一定時間ごとにお湯と混ぜて給餌する装置である。給餌の時には決まった音を鳴らし子豚に知らせるため、効果的な飼料摂取を促す。多産の場合や、母豚の事故時、発育が遅れた子豚の育成という用途で開発、利用されている。

この農場では、MWFを分娩舎で計3台使用している。同じ週に分娩した母豚の中で、産子数が多い豚から子豚を数頭引き抜いてMWFにて人工哺育している。離乳後の弱小子豚の飼育直しは実施していない。

MWFの活用ポイントとなるのは哺乳豚の引き抜き方法である。哺乳豚は免疫を獲得するために初乳を飲ませる事が特に重要なので、農場では分割授乳を行って事前に確実に初乳を摂取させている。その上で、複数の母豚から同時期に哺乳豚を引き抜く事が重要だ。

大きな哺乳豚を同時に引き抜く

引き抜くタイミングは、生後2〜3日目程度を中心に1週間以内で実施する。哺乳豚を選ぶ時のポイントは、群れの中で大きい子豚であり、下痢

をしていない個体を選ぶ事である。

次のポイントは、引き抜く頭数。この農場では哺育はできるだけ母豚自身に行わせたいと考えており、哺乳豚13頭までは母豚自身で十分育成できると判断している。

しかし、母豚の負荷を考慮し、現在は1腹あたり11〜12頭を母豚に残し、1〜2頭を引き抜き1週間分を1つのグループとしてMWFで育成している。現在は、グループの頭数は、1台あたり14頭としているが、導入当初は10頭からスタートした。その後、飼養管理に工夫を加えながら飼養頭数を増やし、引き抜く哺乳豚は大きさがバラつかないように揃える事にも注意している。バラつきが大きいと、体の小さい子豚は他の子豚たちに飲み負けてしまうためだ。

農場では、小さめの子豚を引き抜いてMWFで人工哺育をしていた事があるが、試行錯誤を重ね、全体の育成率を高めるため、大きな哺乳豚をバラつきなく同時期に引き抜く現在の方法にたどり着いた。

また、MWFの導入初期の子豚は飲み方が分からない事がある。他の子豚をまねて飲み始める場合もあるが、正しく飲めていない子豚にはフォローが必要だ。飲めているかは子豚の腹の張り具合を観察して判断し、直接鼻先をMWFの給餌口につける事で、学習を促している。

給餌時の注意点

子豚が下痢にならないように特に注意し、子豚の保温と水の管理を徹底したい。この農場では、下痢をしないようMWFでの飼育開始初日から、餌付用飼料に電解水を入れて与えている。保温については、温度管理が可能なワンタッチボックスを導入し、MWFと組み合わせる事で、着実に事故が減少し、1腹あたりの離乳頭数は改善傾向となっている。

また、給餌量は多すぎると残餌が不衛生になる事や、子豚が給餌口に体ごと入って体表を濡らしてしまい、その後冷えて下痢をする事がある。逆に少なすぎると、栄養が足りないだけでなく、空腹から他の哺乳豚のへそを吸引してヘルニアを引き起こしてしまう問題もあった。そのため最初の1週間は、給餌メモリーを1時間あたり5分間給餌とし、2〜3週間までの期間は最大給餌時間となるように設定した。離乳は母豚による授乳と同様に3週齢で実施している。

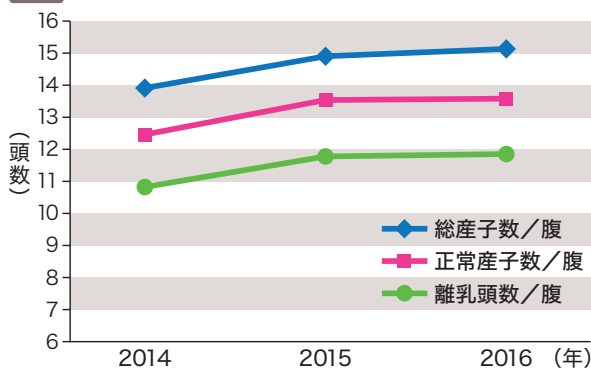
MWFを活用し、出荷頭数を増やす

農場では場長から従業員へ、毎日哺乳豚が下痢をしていないか、尻を観察するよう声かけを行っている。分娩舎では2名体制で作業を実施し、MWFで飼育している子豚についても下痢がないか、治療が必要か、毎日の健康観察を人念に行っている。MWFで飼育した子豚は、離乳時の体重が母豚で



ハイコープ種豚授乳中

図1 農場における生産成績



腹の張り具合で飲んでいるかチェック



給餌器ミルキーウィーンフィーダー



ワンタッチボックスによる保温



給餌口に子豚が群がる



MWFでの飲み方を学習させる